
ねこのこ

蒼月 かなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこのこ

【コード】

N9861N

【作者名】

蒼月 かなた

【あらすじ】

宮は猫だ。仲間からみゃーと呼ばれてる。

そんな宮と仲間の日常の話。

宮のはなし

宮は猫だ。仲間からみゃーと呼ばれてる。

なんでかって？宮がもつとチビだった頃、近所のケイちゃんが神社のお宮さんの下で宮を拾った。

だから宮って名前をもらったの。けどどまだチビだった私はその名前がちゃんと発音できなかった。

仲間に名前を言うのに

「みゃーつ（宮ーつ）みゃーつ（宮ーつ）」

って言ったらメンドクサガツタ灰の馬鹿にみゃーって呼ばれるようになった。

ちっさいからって酷過ぎる！そういったけど宮の抗議は受け入れてもらえず他の仲間もみゃーって呼ぶようになってしまった。

この前、その事を灰に抗議したら 「んなもん、ちゃんと発音できないお前が悪い」 だって！

やっぱりあの馬鹿嫌いだ。

猫は夜集会を開く。宮は飼い猫だけとお外に出してもらえる猫なので毎夜のようにこの集会に参加してる。チビだった宮も最近ガキあつかいされなくなってきた。手足も伸びたし毛だってシナヤカな青色。

だけど灰だけいつまでも子供扱い。自分が前から大人だからってズルイ。

一太は宮がムキなるからかわれるんだっていう。

ムキになんてなっていないもの！っていったら白ねーさんフランクが宮って灰が大好きなのねvだって。違うし。好きじゃないもん嫌いだもん！そう言ったら大笑いされた。ヒドイ。

灰はこのあたりで一番強い猫だ。でも前にボスって事？って聞いたらチガウって。ボスみたいな面倒な事は嫌いだからって。面倒ってどうよ？でも灰がいるからこの辺は安全なんだって。じーちゃん猫

がそう言った。それってボスって事じゃないのかな？

恋の季節がやってきた。猫は一年中恋してるけど、一番恋してる猫達が増えるのは春と秋だ。今は春。

皆、番う相手を求めてしっちゃんかめっちゃんか。

こうなると宮は暇だ。だって宮はまだ大人になりきってない。そもそも番う相手なんて想像もつかない。

この時期に宮と同じで暇を持て余している猫がいる。灰だ。強い猫は普通おねー様がたに引っ張りだこのはずなのにいつも神社の屋根で昼寝してる。そういえば、灰の子供って見たことない。雄にしてはキレーな灰色の毛。緑の目の子猫はきつと可愛いと思う。灰の事は嫌いだけど、子猫とは遊んでみたかった。

そう言ったらとっても変な顔をされた。もしかして、赤ちゃんつくれない身体なの？って聞いたらアホかって頭をはたかれた。あんまりだ。

宮のはなし（後書き）

宮の次は灰視点のお話です。

灰のはなし

宮は俺を嫌いだと言う。

俺が宮を見つけたのは寒い冬だった。神社の鳥居の下に『拾って下さい』と書かれた段ボールとくれば良くある話だ。お粗末な毛布に包まれて4匹のチビがミィミィ言っていた。その中で、一番チビで生き残れなさそうなのが宮だった。1匹、また1匹と兄妹達がいなくなるその中で案の定最後に残った1匹だった。最初はそのままにしておくつもりだったのに傍に行ってみたのは何の気まぐれだろう。どうせ死ぬのならせめてそれまで傍にいてやろうなんて気になってミルク臭い段ボールの中に入った。横になるとブルブル震えるチビ猫は無知のためか生存本能がそうさせたのか俺の腹の横におさまった。

大人の雄猫は子猫を殺す事もある。

もし、奇跡とやらがおきてこのチビが生き残れたら教えてやろう。そんな事を思った。

俺の最初の記憶も段ボールの中から空を見上げているものだった。最初は人に飼われた事もあったが結局今は野良として生きてる。そんな昔の事を考えながら空を見上げてると突然腹のあたりを揉まれて驚いた。子猫が母猫の乳を出しやすくするしぐさだ。どうやら寝ぼけて俺を母親と勘違いしているらしい。

残念だが俺からは乳は出ない。

ちょっと哀れになって背中を舐めてやる。チビはくふんと満足げに鼻を鳴らすと穏やかな寝息をたてた。直観というのは面白いもんでその時の俺にも可笑しな確信が胸に湧き上がった。このチビは生き残るだろう。そして……。その先は考えないようにした。な

んだかちよつと面白くなかつたからだ。

朝が来て、チビはまだ生きていた。人の気配を感じた俺は立ちあがると段ボールを出て離れる。

俺が離れる気配に、初めてチビが泣き声をあげた。

「に。に。みーッ。みーッ」

その声に導かれて子供が現れた。近所の豆腐屋の娘だ。段ボールのチビに気付くと慌てて家に連れて帰った。

俺が知る限り3回死にかけてチビはその冬を生き延びた。春も終りの頃あいつは夜の集會に初めて顔を出した。てっててつと俺の所に来ると訝しげに顔を見上げる。豆腐屋の娘が呼ぶので『宮』って名前は知っていた。だけど俺は敢えて聞く。

「お前名前は？」 「みゃーよ」 「みゃー？」 自分では宮と言ってるつもりらしいのは理解していたけれど舌足らずな様子で一生懸命言ってる姿はちよつとからかうと面白そうだったので「ちがうの、みゃー」 「ふん。みゃーね」 「ちやうーっ！み、ゃーあ！」

「メンドイ。お前今からみゃー」

そういつたらガンツとした顔をして「おまえきらいーっ」といつて逃げてった。俺がお前を助けてやったつてのにこの恩シラズめ。

季節は巡る。チビだった宮も大人に少しずつ近くなる。最近は何の連中に子供扱いされなくなってきたいてちよつと不快。コイツはからかうのが楽しいのに。一太が宮が俺にからかわれるのはムキになるからだつて教えてやってる。うん。まあそれは正しい。ただ、一太がそう言いながら俺をニヤニヤ見ているのは気に食わない。後で絞める。

恋の季節がやってきた。ボスって感じじゃないが俺はここいらで割と強い。雌に声はかけられるけど、どうもその気になった事がなかった。俺はそういつた本能が生来薄いらしい。一太なんかには「よりどりみどりなのに」と言われるが、興味がないものはどうしようもない。

この時期だけ俺の傍におとなしくしてるのは宮だ。他の連中は色恋

沙汰でいっぱい。とても子供の宮を相手にしてる暇なんてない。ただ今年はやつと違った。

「何で灰は子供いないの?」「毛並みと目の色はキレイなんだしきつと可愛い赤ちゃんができるよ」

「灰の事はクライだけど、宮は灰の赤ちゃんと遊びたい」「赤ちゃん嫌い?」「雌猫が嫌なの?」

なんだか今年はやけに絡む。ハイハイと適当に流してたら遂にこんな事たまつた。

「もしかして、赤ちゃんつくれない身体なの?」

思わず何とも形容しがたい気持ちになる。どつからそんなネタを仕込んでくるこのガキは。

俺は「アホか」といつて宮の頭を尻尾で叩いた。あんまりだと言われたがどつちがだ。

次の恋の季節には宮は完全な大人になる。その時に、あの冬の朝感じた直観が正しかったかどうかがわかるだろう。

閑話。一太から見れば

一太いったから見れば、みゃーと灰かいは子供過ぎる。

特にみゃー、自分の事が全然わかってない。どう考えても灰の事が大好きなのにいつも遊び倒されては「嫌いだっ」て言いながら逃げて行く。逃げてく癖に次の日には灰の所にイジられに行くんだからしょうがない。灰だつてそうだ。気に入ってるならヤサシクしてやればいいのにも、みゃーを半べそにしないと気に食わないらしい。ま、みゃーの気持ちは少し分かる。白フランクねーさんが前に言つてたからだけどね。好きだから認めて貰いたいつてヤツだ。最初の出会いからして何で灰を好きになつたかなんて全く見当もつかないけど。面白いからついみゃーにアドバイス。

次の日、灰に絞められました。物事には加減が必要らしい。

これで分かった事。灰は絶対みゃーが自分を好きだつて気付いてる。それから、自分がみゃーを可愛くつてしょうがないつて事も。だからイジメルンダ。ガキだガキ。

くっそー、なんだか馬鹿らしくなってきた。来年の春あたりに、みゃーを狙ってるやつらがいるけど絶対灰には教えてやんない。苦勞しろ。ハゲてしまえ。そう思いながら僕は虎縞の尻尾を振った。

閑話。 一太から見れば（後書き）

体調不良で休止してました。更新は遅いと思いますが宜しくお願
致します。

宮のはなし〜秋〜

季節は過ぎて秋。宮も大人猫の仲間入り。

皆は再び恋の季節。春には雌って勘定されて無かったのが今回からは違ってた。一步外に出ると誰か寄って来る。宮はそんな気分じゃないの！

「うるさいっあっちいけバカッ」猫パンチが相手の鼻にヒットする。ほうほうの体で逃げてく雄を鼻息荒く見送った。

「そんなんじや何時までたつても番がみつからないな」一太いっただに苦笑して言われた言葉を思い出す。ついでにその時馬鹿にしたような灰かいの顔も。腹立ってきた。

でもここで腹を立ててはならない。宮はおとなにナツタノダ。だってこれから灰の所に行くんだもの。なんでって？だって宮は気付いたのだ！灰の傍にいと雄が寄ってこない。虫よけバンザイ！

神社のお屋根の上に今日も灰は陣取ってる。そこに着くとお日様でポカポカ暖められた屋根がとっても気持ちよかった。

「またきたのか？いー加減どれかと番になつてやればどうだ？」尻尾をぺしんぺしん上機嫌そうに上下させながら丸まつてる灰がいう。「絶対や。だって宮があいつらの子猫を産むのなんて想像できないし」そう言つと呆れた目のため息吐かれた。「あんな風に撃退したらそのうち番う相手がいなくなるぞ？そしたらこの辺の女ボスだな」

「ボスじゃないし！ーの！！宮はまだそんな気分じゃないの！！」

そう言つと宮もどっしりと腰をおろし丸くなった。それからいつもの言いあいをはじめ。

「お前まだガキだな」「灰だって番いいないでしょ。じゃあ灰だつ

「てガキじゃん」「俺はお前と違って選択してそうしてんの」「み、宮だつてそうだよ」「違うね。お前、身体は大人になっただけど心はガキのままなのさ。もしくは初めての恋の季節で無意識のうちに怖がってるか」「怖がってないよ！宮は大人だもん！！」「ふうん、じゃあ今回番をえらべるのか？」「う……………それは……………」

ほうらみると言わんばかりの顔された。クヤシイ。クヤシイクヤシイ。

「で、できるよ！」「嘘つきめ」

いつの間にか灰が目の前に来てた。その静かな緑の目には何の感情もつかえない。今日の灰はなんか怖い。

「じゃあ、下でお前を待ってるヤツから選べよ」「や、ヤダ」「やっぱり嘘つきだ」「う、嘘じゃないけど、やなんだもん」

ああ、宮は本当にガキなのだ。そう言われてる気がしてちよこつと泣けてきた。

「じゃあ誰ならいいんだ？」流石にいじめ過ぎたと思ったのか灰の口調が優しくなる。

「わ、わかんない」「そうか？」我慢していた涙が零れそうになる。それを、灰がぺろりと舐めとった。宮はびっくりして顔を挙げた。灰の顔は穏やかな緑の目をしているだけ。

それを見て宮はいつとうちっちゃな子猫だった時を思い返してた。一人ぼつちの宮を暖めてくれた大人猫。あれは灰だと知っていた。

お礼を言いたくて傍にいたくて一所懸命後をついて回った。なのに、灰は宮の事覚えてないみたいで……………。だから、いつつも嫌いつて

いった。宮を覚えてない灰なんて大嫌い！白ねーさんフランクの言葉を思い出す。「宮つて灰が大好きなのねv」そうだよ知ってる。でも灰は？

「灰なんか嫌いだ！」「そーだな」「大っ嫌いなんだから」「知ってる」

なんだかそう言う度に灰の顔が嬉しそうに緩む。宮だけ一人で馬鹿みたい。

「泣くなよ。いじめたくなるから」「なにそれ？」
今日の灰は変だ。いつもより怖くていつもより優しい。

「下にいる奴らが嫌なら俺の子猫を産めよ、宮」

初めて宮って呼ばれて驚いた。ううん、驚くのはそこじゃなくて…

……。ナニ？

「それって宮を好きってこと？」

「そーとも言つ。春に言つてただる俺の子猫を見てみたいって。ならお前が産めばいい」

いきなりで、突然で、世界がひっくり返った感じで宮の心臓はきつと今壊れると思った。それは素敵な考えで、限りなくないと思つていた考えで天と地が逆さまになつてもありえないと思つていたから。灰は、宮の答えを待つ。宮は……。――。

宮のはなし〜秋〜（後書き）

次は灰視点の話です。

灰はなし〜秋〜

季節は過ぎて秋。

あの時の俺の勘が当たっていけば宮は俺の子を産むだろう。

神社の屋根の上で寛いでると、下で宮が雄を追っ払っているのが見えた。

おそらく今日もここに来るのだろう。唯一安心して寝れる俺の傍にでも嬉しいのについつい口から出るのは憎まれ口で……………。

「またきたのか？いー加減どれかと番になってやればどうだ？」宮がその辺の猫と番になる気が無いのを知りながら俺が言う。

「絶対や。だって宮があいつらの子猫を産むのなんて想像できないし」

「あんな風に撃退してたらそのうち番う相手がなくなるぞ？そしてたらこの辺の女ボスだな」わざと大きなため息を吐いてそう言う宮はぶんむくれてこちらを見る。

「ボスじゃないし！いーの！！宮はまだそんな気分じゃないの！！」

そう言うと宮もどっしりと腰をおろし丸くなった。それからいつもの言いあいをはじめ。

「お前まだガキだな」「灰だって番いいないでしょ。じゃあ灰だってガキじゃん」「俺はお前と違って選択してそうしてんの」「み、宮だってそうだよ」「違うね。お前、身体は大人になっただけど心はガキのままなのさ。もしくは初めての恋の季節で無意識のうちに怖がってるか」「怖がってないよ！宮は大人だもん！！」「ふうん、じゃあ今回番をえらべるのか？」「う……………それは……………」

ほつらみると言わんばかりの顔する。

「で、できるよ!」「嘘つきめ」

売り言葉に買い言葉。できる、と言い切った宮に少し腹を立て俺は威圧的に宮の前に立った。

少し怯えたように宮が後じさる。

「じゃあ、下でお前を待ってるヤツから選べよ」「や、ヤダ」「やっぱり嘘つきだ」「う、嘘じゃないけど、やなんだもん」

意地悪にもそう言っつて、宮が嫌だと言っつのを聞きたくて……………ちよつといじめ過ぎた。宮が泣きそうだ。

「じゃあ誰ならいいんだ?」優しい口調に戻して聞けば「わ、わかぬない」とそう答える。本当は俺の事好きなくせに。妙に宮が可愛く見えて「そうか?」と言っつて零れ落ちた涙を思わず舐めとつた。宮はびつくりして顔を挙げる。そして何か考える顔になった。

俺は、宮が死にそうな子猫だった時の事を思い出した。寒さの中で必死に俺の腹の下に潜り込もうとした弱い子猫。俺が人の気配で傍を離れる時、初めて泣いた子猫。

まだ精神的にはガキだが、そろそろいいかも知れない……………。

「灰なんか嫌いだ!」「そーだな」「大っ嫌いなんだから」「知ってる」

いつものやり取りに思わず笑みがこぼれる。意地っ張りな宮。意地っ張りな俺。

「泣くなよ。いじめたくなるから」「なにそれ?」

馬鹿みたいに可愛い、俺の宮。

「下にいる奴らが嫌なら俺の子猫を産めよ、宮」

そう言っつと、宮が固まった。一瞬意味が理解できなかつたらしい。

「それって宮を好きってこと?」

おずおずと聞くその姿はぎこちなく。期待と不安に溢れていて。

「そーとも言つ。春に言つてただる俺の子猫を見てみたいって。ならお前が産めばいい」

ポカンと開けた口が暫く閉じない。俺は辛抱強く待つ。俺の勘が正しかったかどうかを知るために。

「灰が宮を好きなら………トクベツに産んであげてもいいよ。」

まともに俺の顔を見れない癖にそんな言い方をする。俺はそんな宮が愛おしい。

「じゃあ、トクベツに産んでもらおうか」

俺は素直じゃない宮にすり寄って、そつと鼻にキスをした。

にーっ、みーっ、にー。

鳴いてるのは三匹の子猫で。

二匹は灰色、一匹は青色の毛並み。目はまだあいてないので何色がわからないのが残念だ。

八八オヤに良く似た顔をしている。段ボールの中、ちまちまと動き回って乳を探す。

「灰！」

そう言つて顔をあげたのは宮で。俺はそつと頬をすり寄せる。チチオヤは俺。おかげで豆腐屋にフリーパスで入れるようになった。初産の宮は大変苦労し、なんとかこの三匹を見事に産んで今では立派なハハオヤだ。

チビ助達はスクスク育つてる。目が見えるようになったら遊んでやろう。そんな事を思いながら俺はチビ助達を舐めてやる。そんな俺を、幸せそうな宮が頬笑みながら見つめてた。番になってからも時々俺達は憎まれ口をたたき合う。それは愛情を確認し合う儀式みたいなもので。それがなとお互い落ち着かないそんな感じになっていた。

「今日も元気そうだな」

「うん。灰はまた誰かいじめてきたの？」

少し毛並みが乱れてる事に気付き宮が毛づくろいをしてくれる。

「いんや、絡まれたから軽く撫でてやつただけ」

「カワイソーに。灰に撫でられたら暫くこの辺寄りつけないね」

「可哀想なのは俺だ。朝からいらん運動させられたんだからな」

「じゃあそついう事にしといたげるけど」

そんな話をしながら親子五匹、段ボールの中で丸くなる。外は寒いがここはとても暖かった。

灰のはなし〜秋〜（後書き）

次で最後の話になります。

冬

ぼくのなまえは、かいと、とゆー。

かあしゃんのなまえは、みや。とうしゃんのなまえは、かい。いもうとが、みやこ。おとうとが、かいじ。ぼくはそんなかぞくのいっぴきだ。

「かあしゃん、またカイジがいにい」

目が覚めると僕の横にいたはずの弟の灰色の姿が見えなくて母に聞いた。

「さつき、『おれはたびにれる！』って外にいったからね」

「またあ？」

この段ボールは四方の一つの壁が出入りしやすいようにない。カイジはそこからまた（・・・）出てったらしい。

と。。。

「びみゃーつみゃーつみゃーつ」

外でカイジが母を呼ぶ声がする。

「……………冒険は終りみたいね？」

そつと立ちあがり母がカイジを迎えにいった。横にあつた温もりが消えたので母と同じ毛色の都が身じろぎする。しかし、眠りは深いらしく一向に起きる気配はない。そうしているうちに母がカイジをそつと啜えて戻ってきた。スンスンと鼻を鳴らす僕の弟。こいつは弱虫のくせに、すぐ旅に出たがる。たいがい寂しくなつて泣き出して母さんか父さんに啜えられて戻つて来るのに行くのをやめようとしない。母も母で、そんなカイジを止める事はなかった。

「おかえりゆ」と僕がいうと「すん。たりやいま」とカイジが答える。そんな事をしていると都が起きた。「かあしゃん、ごはん」そういつて母さんのお腹の下に潜り込む。慌てて僕等も後を追った。ケド

もうすでに一番での良い乳は都に取られていて……。否。優しい僕等が都に譲ってやったという事で。嘘です。ご飯の競争で僕等は都に勝てた事が無い。こいつ、睡眠欲と食欲だけは僕達の中で一番だ。もにゆもにゆとご飯を飲みながら僕等は三匹仲良く一緒にいる。時々、ふんずけられたり、ふんずけたりするけどそんな事気にも留めない。そんな僕等を母さんが優しく舐めてくれる。

「灰^{かい}！」

母がそう呼んだ。僕達の父さんが来たらしい。

「今日も元氣そうだな」

「うん。灰はまた誰かいじめてきたの？」

そう言つて母さんが父さんの毛を舐めてやる。

「いんや、絡まれたから軽く撫でてやつただけ」

「カワイソーに。灰に撫でられたら暫くこの辺寄りつけないね」

「可哀想なのは俺だ。朝からいらん運動させられたんだからな」

「じゃあそついう事にしといたげるけど」

そんな話をしながら親子五匹、段ボールの中で丸くなる。

父さんと母さんはポンポンと軽口を言いあう。それはいつも楽しそうで見えていて嬉しい。

「とうしゃん、とうしゃんはこのへんのボスにやの？」

「んあ？いきなりどーした。残念だが俺はそんなめんどくさいもんじゃないぞ？」

「よくいつ。宮にもそついつたけど、結局ボスみたいなものじゃない」

呆れたように母さんが言う。

「ボスだけど、ボスじゃにやいの？」

よくわかんにやいーというと大きくなったら分かるかもなって言われた。そうなのかなあ。

外はまだうんと寒いけどここはポカポカ暖かい。

冬（後書き）

短いお話でしたが、お付き合い下さったかた、有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9861n/>

ねこのこ

2011年6月10日17時45分発行